

2009 年度のサービスラーニングを終えて

原田 正樹

本学部にとって、初めてのサービスラーニングプログラムが無事に終了することができた。まずもってそのことに感謝したい。ふりかえれば教育G Pの構想・申請からはじまり、文科省による審査・採択がなされ、今度はそれをどう実現していくかを検討しつつ、一方で新年度から授業が始まり、同時にN P Oへの説明会をしながら活動を創りだしていく…。自転車操業とはよく言われるが、それどころか一輪車から転げ落ちないようにひたすらペダルを回しているような状態であった。

しかしながら、12 月に開催されたサービスラーニング報告会は圧巻だった。学生たちの気づきや学び、そして 1 年間の成長に驚き、活動先のN P Oの皆さんからも沢山の励ましの言葉をいただくことができた。まさにサービスラーニングの底力を感じたときだった。

この一年間そんな慌ただしいなかで、このプログラムの成果を感じることができたのは、学生たちの学ぶ力によるところが大きい。このプログラムでは「2 年次教育」に焦点化してきたが、1 年生と 3, 4 年を結ぶこの時期に、N P Oという現場で、今日的な地域の課題や人々の生活ニーズにふれること。それは新鮮な気づきや問題意識、将来への希望として彼らのなかに何かを残した。2 年次にどういう教育課題を提示し、そのための学習プログラムをつくっていくか。やはりそのことが重要であることが確信できた。

それを支えてくださったのが、N P Oの皆さんである。「最初はサービスランニングって何だと思った」と笑って発言してくださったが、まさに「サービスラーニング」の共通理解からはじまった。専門職養成の実習教育ではない、ボランティア体験でもない。サービスラーニングという新しい学びを手探りではじめたわけだが、そんなときN P Oの方から「一緒につくっていきましょう」と言われたときに、ホッとした。現場のなかで学生たちを育てていただいただけではなく、実はこのプログラムを一緒に創り出していただいたことに心から感謝したい。

この一年間で、学生とN P Oと大学が三者でサービスラーニングを展開するという取り組みの基盤ができたのではないかと考えている。こうしたことがN P Oとの間で達成できたのは、なんと言っても「地域福祉サポートちた」と協働ができたからである。

学内の体制としては、このプログラムのためのセンターを設置し、サービスラーニング研究では国内で第一人者である村上徹也先生、「地域福祉サポートちた」代表の松下典子先生をアドバイザーとして迎えられたこと。専任のスタッフとともに教職員が一つになって会議や研究会を重ねながら進められたことなどがあげられる。

初年度の課題をあげたら切りがないが、こうした成果をしっかりと分かち合いながら、2 年度目に向けてさらに充実したものになるよう努力していきたい。来年度は教育G Pの最終年である。どうこのプログラムを定着させていくかを考えながら、同時にこの取り組みについて客観的に評価を受けなければならない。

今年以上にやることは多くなるが、今年の学生たちの学びの姿を思えば、このプログラムの持つ教育効果を実証していくことが可能ではないかという実感がある。そしてそのことは、これからの新しい社会福祉学部にとって必要な教育活動になるのではないかと考えている。

